

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380967

研究課題名(和文) アタッチメント理論に基づく親子関係支援方法の開発と効果検証

研究課題名(英文) Development and evaluation of the intervention to improve caregiver and child relationship based on attachment theory

研究代表者

北川 恵 (KITAGAWA, MEGUMI)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：90309360

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、Circle of Securityプログラムに基づいて、日本で効果のある親子関係支援の方法を検討することであった。既製のDVD視聴による心理教育と内省的対話を行うCOS-Pプログラム日本語版を実施した後、COSプログラムの中核要素である参加親子自身のビデオ振り返りセッションを実施した。各時点でアタッチメントを評価した結果、COS-Pプログラム終了時点で、子どものアタッチメント不安定型は改善する傾向にあること、無秩序型はすべての介入を終えた半年後に改善することが示された。母親自身のアタッチメントは改善しなくても、子どものアタッチメント改善が可能であることも示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop an evidence based intervention to improve caregiver and child relationship in Japan. The Circle of Security program (COS), developed in US, is evidence based and its key component is tape review of the dyad. As to be more expandable, the Circle of Security Parenting program (COS-P) had been developed in US, which can be practiced widely in community. So, we conducted COS-P which had been translated into Japanese, and then added tape review sessions, and examined what elements of COS would work for what kind of people. It had be shown that insecure attachment assessed by Strange Situation procedure, could improve only by COS-P. The main finding was that disorganized attachment had decreased from 20% of the sample (before intervention) to 0% (six months after whole intervention). We found that even though mother's attachment representation, assessed by Adult Attachment Interview, had not changed, child's attachment could improve.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：アタッチメント 親子関係支援 Circle of Security

### 1. 研究開始当初の背景

乳幼児が養育者に形成するアタッチメント(愛着)の質が、子どもの社会情緒的発達や精神的健康に長期的な影響を及ぼすことが縦断研究で明らかになっている(Sroufe et al., 2005; Grossmann and Grossmann, 2005)。そのため、子どもが養育者に形成するアタッチメントの質を改善する支援が、子どもの不適応や病理への予防ならびに早期介入として必要である。米国では発達早期の親子関係支援プログラムが数多く開発されているが、エビデンスに基づかないものも多く、科学的根拠に基づき、かつ効果の検証が示されているプログラム開発の必要性が提唱されている(Berlin et al., 2005)。

エビデンスに基づく親子関係支援プログラムの中で最も注目されている1つが米国で開発された the Circle of Security(以下、COS)プログラム(Cooper et al., 2005)である。介入前に親子の行動観察と親への面接による親子関係の評価を行い、治療目標を定める。行動観察はビデオ録画し、良好な相互作用を増やしながら問題となる相互作用を乗り越えるために、親と視聴することが効果的と思われるビデオ場面を抽出・編集する。プログラムでは、アタッチメントについての心理教育を行いながら、自分たちのビデオ場面を振り返り、支援者と内省的な対話をする。標準的には6組のグループで、毎週1回のセッションを全部で20回行う(5~6カ月)。介入による子どものアタッチメント改善効果が実証されており、(Hoffman et al., 2006)。すでに米国、カナダ、イギリス、オーストラリア、ノルウェー、ドイツなどでCOSプログラムが実施され、世界乳幼児学会(2008、2010、2012)などで成果が多数報告されていた。

日本においても、子育て不安から虐待予防・再発防止に対応しうる、エビデンスに基づいた親子関係支援の方法を開発することが必要である。研究代表者は、2007年にCOSプログラムの研修に参加し(日本心理臨床学会平成19年度国際交流助成金)開発者によるスーパービジョンを受けながら、日本で初めてCOSプログラムを実践し(科学研究費補助金若手(B)平成21~24年度)COSプログラムが日本人親子にも有効であることを認めてきた(Kitagawa et al., 2010など)。

しかし、親子をビデオ撮影し、治療目標に添ってビデオ場面を編集するCOSプログラムは、習得や実施においてコストが高い。COS開発者も同じ理由から、簡易版とも言える既製の心理教育DVDを用いたCOS Parenting(以下、COS-P)プログラム(Cooper et al., 2009)を開発している。これはマニュアルに沿って全8回(毎週1回、2か月)を行えばいいので、このCOS-Pプログラムの信頼性・妥当性の検証ができれば、地域の子育て支援者に対しても、親子関係の改善に向けた実施可能なプログラムを提供できると考えた。

そこで、「COS-Pプログラム日本語版」全8

回を行った後に、続けて、COSプログラムを応用した「ビデオ振り返りプログラム」を実施し、それぞれの時点での効果を検証することが必要と考えた。介入前の評価で関係性の問題が軽度の事例は、COS-Pプログラム終了時に改善効果が表れると予測した。介入前の評価で親自身の葛藤が強い事例は、ビデオ振り返りセッションも行うことで介入効果が表れると予測した。くわえて、効果の持続性を確認するために、介入終了半年後に親子関係の評価を実施することが必要と考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、親子の関係性をアタッチメント理論に基づいて支援するための方法を the Circle of Securityプログラムを応用して開発し、その効果を多面的な測定方法で検証することを目的とした。

### 3. 研究の方法

研究開始時の予定では、毎年8組の親子を定員として3年にわたって介入を実施し、最終年度の4年目は結果の最終的な分析と報告に取り組む計画であった。しかしながら、2013年度及び2014度はそれぞれ6組の参加者であったため、4年かけてプログラムを実施し、より多いサンプル数での最終的な分析を行うこととした。

#### (1)プログラムの実施

「COS-Pプログラム日本語版」

健全なアタッチメントに必要な親の関わり方について、心理教育DVDの視聴とグループでの対話を通して学ぶ、全8回のプログラム(Cooper et al., 2009; 日本語版は「安心感の輪」子育てプログラム(北川他訳、2013))を母親に実施した。

「ビデオ振り返りプログラム」

COS-Pプログラムに引き続き、自分たち親子のSSPから編集されたビデオ場面を視聴し支援者と内省的な対話を行うビデオ振り返りプログラムを実施した。これはCOSプログラムの応用であり、すでに十分な心理教育を受けている参加者に、ビデオ振り返り部分だけを集中的に行う手法である。

#### (2)実践の効果検証

介入前、COS-Pプログラム終了時、ビデオ振り返りプログラム終了時、介入終了半年後に、親子関係の評価を次の方法によって行った。

(a)ストレンジ・シチュエーション法(以下、SSP; Ainsworth et al., 1978) に実施

SSPは子どものアタッチメントを評価する最も信頼性の高い方法である。乳児版分類有資格者である研究協力者の梅村と岩本が分類をした。幼児版分類のトレーナー資格をもつEllen Moss教授から専門的知見を得た。

(b)成人アタッチメント面接(以下、AAI; George et al., 1996) に実施

親のアタッチメント表象はAAIによって測

定した。研究代表者と研究分担者（数井、工藤）は、訓練を経て認定・分類の資格をもっており、分類を行った。

(c)COS インタビュー（Cooper et al., 2005）に実施

COS プログラムで標準的に用いられる親への面接である。親の内省能力や、親がもつ自分や他者についての表象や防衛方略を評価できる。研究代表者は、COS プログラム開発者による訓練を受け、臨床的評価について信頼性がある。岩本が、内省能力を評価した。

(d)アタッチメント投影法（以下、PARS；久保（北川）2000）に実施

研究代表者が開発したアタッチメント投影法であり、日常的でストレスフルな親子場面への自由な物語作成を求める。研究代表者らが健常サンプルで行った調査では、物語に表れるストレスの高低や関係性を通してストレスが解決される見通しに、AAI との関連が認められた（Kitagawa et al., 2008）。PARS の共同研究を行ってきた研究分担者（松浦）と研究代表者で PARS を分析した。

(e)PSI 育児ストレスインデックス日本版（兼松他、2006）に実施

Parent Stress Index の日本語版である。親の育児ストレスを、子どもの特徴に関するストレス尺度と、親自身のストレス尺度からなる全 78 項目への自己評定により評価する。

#### 4. 研究成果

##### (1)参加者

各年度に参加した子どもの性別と月齢は表 1 の通りであった。

表1. 各年度の子どもの性別と月齢

	子ども			平均月齢( 介入前アセスメント時)
	男児	女児		
2013年度 6組	2	4	54.83 (SD=9.11), range 15-74	
2014年度 6組	4	2	22.17 (SD=7.31), range 12-31	
2015年度 8組	6	2	28.50 (SD=12.68), range 18-60	
2016年度 7組	5	2	27.00 (SD=11.74), range 12-47	

研究期間 4 年間の参加者は、合計 27 組の親子であった。子どもは、男児 17 名、女児 10 名、平均月齢 31.52 か月（SD = 16.81）、range12-74 であった。母親の平均年齢は 36 歳（SD=3.84）、range27-43 であった（平均月齢及び年齢は、介入前アセスメント時）。

##### (2)プログラムの実践と参加状況

プログラムは毎週の頻度で、まず COS-P プログラム全 8 回を実施し、次に、介入前アセスメント時及び COS-P プログラム終了時に撮影した SSP 場面からのビデオ振り返りセッションを、毎回 1 組の親子を対象に実施した。そのため、参加親子の人数に応じて、ビデオ振り返りセッションの回数が異なった。その後、ビデオ振り返りセッション後の SSP を実施し、親子が成し遂げた変化を確認するためのビデオ振り返りセッションを、毎

回 2 組～3 組対象に実施した。そのため、セッション数は全部で 17～18 回であった。

参加者の出席率の年度ごとの平均は、2013 年度は 81.3%、2014 年度は 86.0%、2015 年度は 93%、2016 年度は 95%であった。出席率は毎年上昇した。また、全体的に出席率が高く、本プログラムの内容が参加者のニーズに合致していたと考えられる。

##### (3)効果検証

2016 年度参加者の、介入終了半年後のアセスメントは 2017 年 6 月の実施であるため、全時点のデータ収集が完了している 2015 年度参加者までの結果（20 組）を報告する。なお、2013 年度参加者のうち 1 組は、介入終了半年後のアセスメントに参加しなかったため、時点のサンプル数は 19 組であった。

< SSP について >

各時点の SSP 分類結果を表 2 に示した。

介入前時点において、20 組中 10 組（50%）が安定型であり、4 組（20%）が無秩序型であった。世界での地域サンプルの標準的な分布は安定型が約 6 割、無秩序型が 15%程度といわれていることから、本研究の参加親子はそれと同程度、あるいは、やや安定型が少なく、無秩序型多い特徴を示していた。

表2. 各時点のSSPの分類結果

	Time1	Time2	Time3	Time4
Secure(B)	10	12	11	16
Avoidant(A)	2	2	5	1
Ambivalent(C)	4	2	2	2
Disorganized(D)	4	4	2	0

Time1: 介入前、Time2: COS-P後、

Time3: ビデオ振り返り後、Time4: 介入終了半年後

COS-P プログラム終了時点で、アンビバレント型は減少しており、心理教育中心の介入でアタッチメントの不安定型は改善する可能性が示されたが、これについては、サンプル数を増やした検証が必要である。もっとも注目すべきは、介入終了半年後時点でのアタッチメント改善効果である。アタッチメントの深刻な問題である無秩序型は、介入後も時間をかけて改善することが示されたが、これが、ビデオ振り返りセッションも含めた、より深いレベルの介入の効果なのか、あるいは、COS-P プログラムだけによっても、時間をかけて改善するものなのかは、本研究からは結論づけることができない。今後、COS-P プログラムの効果研究が、介入終了後のフォローアップデータも含めて実施されると、本研究での 時点の改善をもたらした要因が明らかになると期待できる。

< AAI について >

AAI については、2015 年度参加者の 時点の分類が確定途中のため、2014 年度参加者ま

での結果( 12 名、 11 名)を報告する。介入前時点において、安定自律型(F)2名、軽視型(Ds)5名、未解決型(U)5名であった。母親の結果は、標準的なサンプルの比率より、安定型が少なく、未解決型が多い特徴を示した。また、介入終了半年後においても、母親のアタッチメント分類結果は変わらなかった。時点のアセスメントに参加しなかった母親はU型であった。

本プログラムが、母親のトラウマに直接焦点を当てるものではなく、むしろ、子どものアタッチメント改善を目的として、母親が子どものアタッチメント欲求への理解を高め、応答できるようになることを目指していることから、これらの結果は妥当である。つまり、母親のアタッチメント表象そのものが改善しなくても、子どものアタッチメントの質は改善可能であることが明らかになった。

#### <その他の結果>

COSIからは、母親が子どもの行動や事実に言及する「外的言及」、内的状態に言及する「内的言及」を数えた結果、アタッチメント回避型の子どもをもつ母親に「外的言及」が多いことが示された。プログラム参加を通して、内的状態への言及が増えることが事例的に検討された。

PARSについては、研究期間中にアタッチメント投影法である Story Stem の評価方法開発者(Allison Splaun氏、Iris Reiner氏)から専門的知識を得た。Splaunたちの評価方法においても、刺激場面から標準的に期待される否定的なテーマを避けた反応をすることが、母親のアタッチメント表象と有意に関連したことが示された。そこで、本研究でも、「特殊」な反応数を数えた。4枚の刺激画への半数以上の反応が「特殊・不安定」であった母親のAAIはU/Ds2/Ds3であり、トラウマ体験未解決の心の状態であること、またアタッチメント経験の傷つき体験を、アタッチメント対象を侮蔑する(Ds2)ことで防衛している心の状態と関連することが考察された。

PSIについて、子どもについてのストレスは各時期においてほとんど変化しなかった。ところが親ストレスは、ビデオ振り返りセッション後に高まる母親が多かった。SSPにおいても、時点に回避型と分類される子どもが増えていることから、自分自身と子どもの相互作用に目を向けるビデオ振り返りセッションが母親に一定の負荷を与える可能性、もしくは、これまで防衛的に対処していた母親のストレスを実感させる働きがある可能性などが考えられる。これについては、セッション記録などを詳細に検討したい。

以上より、本研究で行った、全8回のCOS-Pプログラム実施後に、ビデオ振り返りセッションを行う介入が、特に介入終了半年後の子どものアタッチメント改善に有効であることが示された。特に、母親自身のアタッチメント表象そのものを介入の対象としなくて

も、子どものアタッチメントへの応答を改善することが可能であると示されたことは、親子関係支援における介入の焦点を裏付ける重要な知見といえる。全8回で実施可能なCOS-PプログラムはRCTデザインによる効果研究が可能であり、その進展が期待される。その際、介入終了半年後及び一年後のフォローアップデータを測定し、本研究のデータと比較することで、ビデオ振り返りセッションを追加することの意義がより明確になると考えられる。

なお、日本の育児文化に応じた心理教育の修正については、特に、祖父母世代との育児の考え方の違い、夫婦関係や夫の育児への関与、周囲の目によるプレッシャーといった日本の母親の負担を取り上げることが有効であった。このような子育て文化・風土に即した工夫の必要性については、欧米の親子関係支援の研究者との検討を継続したい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

北川恵、子どものアタッチメント健全化を目指した親子関係支援、日本精神分析的心理療法フォーラム学会誌、査読無、4、2016年、50-57。

北川恵、アタッチメントに基づく親子関係支援プログラムとアタッチメント理論の臨床への応用、日本サイコセラピー学会雑誌、査読無、16、2015年、63-69。

北川恵、アタッチメントに基づく親子関係支援、児童青年精神医学とその近接領域、査読無、56、2015年、48-54。

北川恵・岩本沙耶佳、アタッチメントに焦点づけた親子関係支援の実践と親子の変化、心の危機と臨床の知、査読無、16、2015年、93-104。

北川恵、アタッチメント理論に基づく親子関係支援の基礎と臨床の橋渡し、発達心理学研究、査読有、24、2013年、439-448。

[学会発表](計20件)

岩本沙耶佳・梅村比丘・鶴本容子・北川恵、母親による子どもの内的状態理解と子どものアタッチメント 子どもの外的・内的状態への言及に着目した検討、日本子ども虐待防止学会第22回学術集會おおさか大会、2016年11月26日、「大阪国際会議場(大阪府・大阪市)」

Megumi Kitagawa, Sayaka Iwamoto, Miyuki Kazui, Shimpei Kudo, Hiromi Matsuura, & Tomo Umemura. What element of the Circle of Security program is effective for children with different attachment category? Symposium conducted at the 15<sup>th</sup> World Congress of World Association for Infant Mental Health, 2016年5月30日、

「Prague (Czech Republic)」 (査読有)  
Megumi Kitagawa, Sayaka Iwamoto, Miyuki Kazui, Shimpei Kudo, Hiromi Matsuura, & Tomo Uemura (2015, August 7th). What element of the Circle of Security program is effective for caregivers with different attachment state of mind? Poster presented at the 7th International Attachment Conference, 「New York (USA)」 (査読有)

Megumi Kitagawa, Sayaka Iwamoto, Miyuki Kazui, Shimpei Kudo, Hiromi Matsuura, & Tomo Uemura What element of the Circle of Security program is effective? : Comparing the quality of parent-child relationship after parents received the psycho-education with after they reviewed the tape of themselves. 14<sup>th</sup> WAIMH World Congress. 2014年6月19日、「Edinburgh (UK)」 (査読有)

〔図書〕(計 2 件)

森茂起・菊池春樹・北川恵・徳山美知代・森田展彰、岩崎学術出版社、「社会による子育て」実践ハンドブック - 教育・福祉・地域で支える子どもの育ち、2016年、256ページ (54-63、167-176)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

北川 恵 (KITAGAWA MEGUMI)  
甲南大学・文学部・教授  
研究者番号：90309360

### (2) 研究分担者

数井 みゆき (KAZUI MIYUKI)  
茨城大学・教育学部・教授  
研究者番号：20282270

工藤 晋平 (SHIMPEI KUDO)  
京都大学・グローバル生存学大学院連携ユニット・特定准教授  
研究者番号：70435064

松浦 ひろみ (MATSUURA HIROMI)  
京都女子大学・発達教育学部・准教授  
研究者番号：70314169

### (3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

岩本 沙耶佳 (IWAMOTO SAYAKA)  
梅村 比丘 (TOMO UEMURA)